

2024年(令和6年)7月25日

## 病院長からの一言 弘前大学医学部附属病院改革 プランの公表について

弘前大学医学部  
附属病院長 袴田 健一



2024年4月から医師の時間外・休日労働の上限規制がスタートしました。6月からは本院の全ての医師の勤務実績に基づいて診療科別にヒアリングを実施し、長時間労働の改善に向けた協議を続けています。医師が健康を維持しながら質の高い医療を提供し続ける環境整備が目的です。患者さんの診療が最優先ですので、単純に労働時間を短くすれば良いという性格のものでもありませんが、業務改善と効率化を進めながら時間外労働時間の短縮に一層のご協力をお願いします。

さて、附属病院の運営を取り巻く環境は大きく変化しています。コロナ禍を経て入院診療から外来診療へのシフトと在院日数の短縮が顕著となり、病床の再配置や人的・物的医療資源の再配分が必要となりました。コロナ禍以前からですが、医学・医療の進歩によって高額な新規薬物治療、ロボット手術、血管内治療、リハビリテーション、認知症診療のように急速に拡大する分野がある一方で、縮小する分野もあり、医療ニーズは変化し続けています。少子化は確実に進んでいます。変化は診療だけではなくありません。全ての医療職の臨床教育の場が学部から病院に大きくシフトし、院内に多職種が共有できる教育の場を整備する必要がありますが生じています。特定臨床研究を推進し、AMEDや科学研究費などの外部資金を獲得しながら研究を進めることも本務です。さらに、医師少数県にあって、社会からは地域医療体制維持への期待が高まるばかりです。このような大学病院としての役割を果たし続けるためには、増収策と支出の削減を講じて財務運営の健全化を図り、計画的に施設・医療機器等の整備を進めてゆく必要もあります。物価高の中で、医療職の給与や手当も病院収入を原資として適切に上

げてゆかなければなりません。

実は、このような本院の課題は、全ての大学病院が抱えている課題でもあります。とりわけ医師の働き方改革によって大学病院の担うべき診療、教育、研究、地域貢献の4つの機能に多大な影響が生じることが懸念されたことから、この度文部科学省からの指示により、大学病院が自院の役割と機能を実情等を踏まえた分析に基づいて再確認を行い、「大学病院改革プラン」を策定し公表することとなりました。本院も2029年までの6年間に取り組む内容を「弘前大

学医学部附属病院改革プラン」として策定し、6月27日にホームページ上に公表いたしました。

改革プランは「運営改革」「教育・研究改革」「診療改革」「財務・経営改革」の4つの柱からなりますが、幸いいずれの項目も文科省の要請を待たずして、昨年来本院が自ら検討し、病院運営会議や科長会で報告、審議、了承いただいていた改革案の項目と一致しており、整理して記載したものとなります。掻い摘んで申しますと、「運営改革」では、変化に応じて柔軟に医療資源の再配分を進め、必要な人材を確保、働きやすい職場を作ること、「教育・研究改革」では、多職種連携教育環境の整備と特定臨床研究支援体制の充実、「診療改革」では業務改善とタスクシェアによる労働時間短縮と遠隔医療推進による地域貢献、「財務・経営改革」では、人材補充による診療機能の最大化と手術室拡充による経営基盤の強化、となります。病院ホームページの「病院概要」に掲載されていますので、是非ご確認いただき、本院の改革にご協力いただければ幸いです。

## 各診療科等の紹介

【材料部】



材料部は中央診療棟3階に位置しています。「材料部」と聞いてどんなことをする部署を想像するでしょうか。かつて、病院内で使用したRMD(再使用可能な医療器材)は各外来・病棟で一次洗浄が行われ、その後に材料部に持ちこみ滅菌をすることが行われていました。現在では一次洗浄を廃止することで外来・病棟の省力化を図るとともに、材料部での中央化処理を進めることで、専門知識を持ったスタッフによる質の高い洗浄を実践しています。また、本院にSPD(医療材料物流管理)が導

入される以前は、材料部がガーゼやアルコール綿などの衛生材料の作成や、酸素マスクや血管穿刺針などの医療材料の払出業務を行っていました。現在では衛生材料の取り扱いの一部にとどめ、物流は外部のSPDへ委託しました。現在の材料部に求められる主な役割はRMDの洗浄・消毒・滅菌における品質保証、感染管理、安全管理、院内への安定供給であり、安全な医療が患者さんに適切に提供されるように、本院の医療を側面から支えています。

医療を取り巻く環境が大きく変わる中で、材料部にも変化が求められています。進歩を遂げた手術支援ロボットは精密な操作と低侵襲手術を可能にし、患者の治療期間の短縮に大きく貢献しています。今後、本院でのロボット手術件数は増加の一途を辿ると予想される一方で、手術支援ロボットで使用する器具は入り組んだ構造かつ繊細であり、材料部での再生処理では大変複雑な工程を経るため、時間を要する作業となりました。患者さんの安全を守り遅滞なくRMDを供給するためには専用の洗浄装置を設置し、特殊な洗浄スキル・安全点検・保守などの知識と技術を習得すること、そのために優秀な人材を確保することが材料部においても求められています。さらに医療における人材不足が深刻化する将来においては、スタッフ間でのタスクシフト・タスクシェアは重要課題であり、材料部が病院内で職能を發揮できる作業についてあらためて検討し、担当業務を拡大することも必要と考えます。今後も弘前大学医学部附属病院を支えるインフラ部門として質を低下させることなく、求められる役割を材料部スタッフ一同で果たしていきます。

(材料部部長 津田英一、  
看護師長 須藤里美)

## CT装置の更新・放射線治療装置の導入

平素より放射線部の管理・運営に格別のご協力を賜り、誠にありがとうございます。この度、中央診療棟1階の診断用CT装置と中央診療棟地下2階の放射線治療用CT装置を最新型に更新し、更に中央診療棟地下2階に新しい放射線治療装置を導入いたしました。

診断用CTは320列、放射線治療用CTは80列の多列型であり、両装置ともに機械学習を活用した画像再構成機能を備えています。これにより、画質が大幅に向上し、患者さんの被ばく量も低減されます。特に診断用CTは、16cmの範囲をわずか0.24秒で撮影できる高速性能を実現しました。これにより、動きのある臓器の撮影でも、ぶれが少なく鮮明な画像を得ることが可能です。また、放射線治療用CTは開口径が世界最大級であり、砕石位の体位でも装置と患者さんとの接触なしに撮影が行えます。



新たに導入された放射線治療装置は、トモセラピーの最上位モデルであり、東北・北海道地区の大学病院では初めての導入例です。この装置は、回転型IMRT(VMAT)、動態追尾照射、全身照射に対応しており、複雑な形状の標的に対しても、正常臓器を避けながら副作用を最小限に抑えた照射が可能です。自動輪郭抽出機能を備えた治療計画装置も併せて導入いたしましたので、高精度放射線治療の準備にかかる時間が短縮され、迅速な治療開始が可能になりました。これにより、本院の診療機能の大幅な向上が期待されます。

引き続き、皆様の変なめご支援とご指導を賜りますようお願い



申し上げます。(放射線部長 青木昌彦)

## 先憂後楽

職場における多様性って  
何だろう



病院長補佐 掛田伸吾

されたという。「津軽賞」は地域から世界へ発信する将来の研究者のためにはと思うが、それを導いたのはシニア世代とこれからの世代だ

と知り感動が深まった。

さて、かくなる私も微力ながら選ばれる魅力的な職場を目指して日々修行中である。そのためのキーワードにダイバーシティ&インクルージョン(D&I)があるとは認識するも、医療現場における多様性の実現は難問である。多様性のある職場と聞くと、ジュニア世代が活躍し、女性が輝く職場を連想するが、前提としてジェンダー、ジェネレーション間の相互理解と歩み寄りが大切である。更に地域間を多様性ととらえる感性はより成熟した職場に通じると思う。今回の津軽賞における話題は、地域間の相互理解、シニア世代の活躍も重要な要素であることを教えて

くれる。ジュニアとミドル、そしてシニア世代が楽しく働ける職場は、きっと魅力的だと思う。以前に自分たちのHPに「我々が目指す職場環境は、何歳になっても、無理せず、楽しく働ける職場」などと書いてはみたが反響はなかった。思うに一方の世代からの意見で共感を期待することに多様性の本質を見失っていたと感じる。ミドル世代の私からであれば「シニアと取り組むジュニアの育成、ジュニアと考えるシニアの働き方」などが適切だったのかもしれない。いずれにせよ、今後の職場のためには、D&Iは目的にとどまらずツールとしても認識するべきと感じている。

私事で恐縮なのだが、弘前大学大学院医学研究科の公開講座を企画することになった。市民への健康についてテーマは「こどもの健康」と決めた。講師の先生方に承諾をいただき、ポスターも完成となった時に、ポスターデザインについてご意見をいただいた。ポスターは修正することになったのだが、初回版と修正版を見比べ私は愕然とした。修正版は、満面の笑みの子どもたちのイラストが入り、色合いも暖かく、とても魅力的だったのである。一方、初回版は寒色で事務的にさえ見えた。なぜ私は子どもの企画にこのような配慮ができなかったのだろうか、これが初老症状というやつか、と悲しく

なった。そんな折、「弘前大学太宰記念 津軽賞」を知った。これは高校生を対象とした地域研究論文コンテストであり、昨年は500件をこえる応募があったそうである。私は応募数の多さに驚いた。地域の研究に着眼した企画の素晴らしさに加えて、応募ポスターは太宰のイラストとリンゴの花があしらわれ品があり素晴らしいものだった。そのポスターが弘前大学の学生の考案と聞かされ瑞々しい若者の感性に驚嘆するとともに先日の悲しい気持ちも想起されたその時、この企画の発案と成功にはシニア世代の方々のご尽力があったと教えられた。聞けばその方々は、全国の高校へ、時には足を運び広報

### 第25回家庭でできる看護ケア教室を開催

令和5年10月3日、看護部主催による市民公開講座「家庭でできる看護ケア教室」を開催し、25名の方に参加いただきました。本院では令和5年8月に「脳卒中・心臓病等総合支援センター」を立ち上げ、発症予防などの啓蒙活動を積極的に行っています。今回はその活動の一環でもあり「今日から始める脳卒中予防！～薬や血圧の知識を再確認してみよう～」をテーマとして行いました。



前半は看護師が講師となり、脳卒中や血圧、塩分についての講義と、正しい血圧測定方法の演習を行いました。チェックシートで自身の塩分摂取の傾向を把握する、自分の好きな献立の塩分量を知り、どう置き換えれば減塩になるのかを考える等、和気あいあいとした雰囲気で行われました。後半は薬剤師より「生活習慣病のお薬」「脳卒中の予防に用いられる血液サラサラにする薬」をテーマに、作用や副作用、注意点について講義が行われました。薬剤に関しては参加者からの質問も多く、降圧剤等が市民にとって身近な薬剤であることを再認識しました。参加者からは、「脳卒中予防の大切さがわかった」「生活習慣、特に食生活を見直す機会になった」「薬の作用、副作用、飲み方などの注意点が分かった」等の感想が聞かれました。青森県は言わずと知れた「脳卒中多発県」です。数年前に開催した時よりも参加者の知識が向上していることを実感し、県や自治体等の啓蒙活動の成果を実感する好機にもなりました。

(脳卒中リハビリテーション看護認定看護師 福岡幸子)

### 第16回弘大病院がん診療市民公開講座を開催

弘大病院がん診療市民公開講座は今回で第16回を迎え、令和5年12月3日の日曜日に弘前市民会館大会議室の会場とオンラインとのハイブリット形式で開催されました。

今回は「大腸がん」を大きなテーマとし、消化器血液内科学講座の菊池英純先生より「大腸がんの早期発見と内視鏡治療」について、次に消化器外科学講座の三浦卓也先生より「大腸がんの手術について～結腸がんと直腸がん～」について、最後に腫瘍内科学講座の斎藤純介先生より「大腸がんの抗がん剤治療について：目標は何か？」についてそれぞれ30分という限られた時間の中でわかり易く講演していただきました。カメラを内蔵したスコープやロボットアーム等を用いた治療は傷も小さく回復が早い、そして術後障害が少ないなどのメリットがある治療を行っている他、近年ではAI(人工知能)を活用した診断補助や統合解析、がん遺伝子解析による治療の決定

なども行われていることについて紹介されました。またそういった最新技術の活用だけではなく、患者さんのQOLや状況に応じた診療を行っているとの内容でした。

今回は会場28名、オンライン17名の計45名の方がご参加くださいました。ご講演くださりました講師の先生方、ご参加くださいました市民の皆様、この場を借り



て御礼申し上げます。今年度も令和6年12月1日(日)の開催が決定しておりますので、奮ってご参加ください。

(腫瘍センター 佐藤 温)

### 脳卒中と心臓病教室～親子で体験してみよう！～を開催して

青森県・弘前大学医学部附属病院脳卒中・心臓病等総合支援センターは令和5年8月に青森県民の健康寿命延伸を主たる目的として開設され、様々な活動を展開しています。啓蒙活動の一環として、令和6年1月8日(月祝)、弘前駅前公共施設ヒロスクエア3階イベントスペースにおいて「脳卒中と心臓病教室～親子で体験してみよう！～」を開催しました。心疾患及び脳血管疾患は青森県民の主要死因死亡率の上位を占めており、早期治療及び予防啓蒙について県を挙げて取り組んでいます。幼少期から正しい知識を身につけることによって、家族全員で疾患予防の意識を高めてほしいとの強い思いでイベントを企画しました。当日は大人75名、子ども80名、計155名のご参加をいただきました。

イベントでは、「子ども脳卒中教室」と題した啓蒙動画をご覧いただいた後、「脳外科手術体験」、「聴診器を使って心臓と肺の音を聞いてみよう」、「人体パズルを組み立てよう」、「家族と食事の塩分計算をしてみよう」、「バイタルサインを測定してみよう」、の全5



ブースを自由に体験してもらいました。脳外科手術体験では脳神経外科学講座齊藤敦志教授による指導のもと、電子顕微鏡を使いお米に字を書く体験を通し、子どもたちは手先の繊細さが求められる手術の難しさと楽しさを学んでいました。食事の塩分計算ブースでは、日々の食事に含まれる塩分量の多さに家族で驚いている様子が見受けられました。

大きなトラブルもなく盛況のうちに無事イベントを終えることができました。開催に際しご尽力いただいた関係者の皆様、またボランティアとしてイベントを盛り上げていただいた医学部学生の皆様に深く感謝申し上げます。今年度は依頼のあった小中学校等に直接伺い、疾患予防の重要性を学べる体験型イベントを企画しています。今後ともよろしく願い申し上げます。

(センター員 社会福祉士 佐藤誠人)

### 津軽塗ピアノお披露目の院内コンサートを開催



弘前の伝統工芸品といえば津軽塗が有名ですが、本院では令和6年3月に弘前市内在住の三上瑛子さんより津軽塗のピアノを寄贈いただきました。このピアノは今から約50年前に100台ほど限定製造されたもののうちの1台で、寄贈者のご家族が長年大切に弾いてきた貴重なものです。この度、「患者さんはじめ大学病院の方々

に音楽に親しんでいただきたい」とのご厚意により寄贈いただきました。

本院では、このピアノのお披露目も兼ねて5月15日に入院患者さん限定の院内コンサート「ピアノとオーボエの夕べ」を開催しました。ピアノ寄贈者の三上さんの音楽仲間でもある市内の音楽家、古川佳子さん(ピアノ)と西沢勝則さん(オーボエ)により、クラシックの名曲をはじめジブリ映画から「さんぽ」や「崖の上のポニョ」のほか、「瑠璃色の地球」など馴染みの音楽を演奏していただきました。感染症対策のため入院患者さん限定ではありましたが、大勢の方が会場に訪れ、生演奏ならではの



の会場に響き渡るハーモニーに聴き入っていました。

コンサート会場となった外来待合ホールには、看護の日を記念して看護部の企画による美しいフラワーアレンジメントが展示されており、観客の皆さんには生花も鑑賞していただく機会となりました。

(医事課)

### 国際連携視察報告会(ハワイ・カンボジア)を開催(5/22)

令和6年5月22日に国際化推進委員会の主催で、国際連携視察報告会(ハワイ・カンボジア)を開催しました。この報告会は、本院における国際化を推進、また本院職員への国際連携の重要性を啓蒙することを目的として開催しました。国際化推進委員会は、令和5年7月に設置された国際推進ワーキンググループが、令和6年5月に機能強化のため委員会として格上げされたものです。

報告会では、まず袴田健一病院長から病院における国際連携の意義など概要について説明がありました。続いて松田友美看護師長から、米国ハワイ州のコナ・コミュニティ・ホスピタル等の視察について、離島における地域医療や、現地の看護システムに触れ看護師目線からの視察報告がありました。次に、脳神経外科・齊藤敦志教授(病院長補佐(国際化))から、カンボジア王国プノンペン(サンライズ・ジャパン・ホスピタル)やカンボジア脳神経外科学会の視察について、カンボジアの歴史や医療の現状に触れ、脳神経外科を例とした医療支援の在り方などの報告がありました。最後に袴田健一病院長から、今後は医師や医師以外のメディカルスタッフ及び事務職員の海外派遣を、誰でも参加できるようにハードルを低くして実施していきたい旨の挨拶がありました。

本報告会には、医師、メディカルスタッフ、事務職員、医学部生など、56名の参加者が集まり、



袴田病院長から概要説明



松田看護師長からハワイ視察報告



齊藤教授からカンボジア視察報告



満員の会場(追加の椅子も用意)

医療従事者における国際化の関心の高さが伺えました。

今後は、ハワイ州のコナ・コミュニティ・ホスピタル及びカンボジア脳神経外科学会とそれぞれ部局間協定を締結する予定です。なお、当該部局間協定では、本院職員が現地でも活動する際のサポー

ト会社も含めることで、本院職員をスムーズに海外派遣できるような仕組みを検討しております。また、国際化推進委員会において、短期の海外連携視察プログラムなど作成し、実際に本院職員を派遣することを計画しています。

(総務課)

### 看護の日2024

毎年5月12日は「看護の日」です。近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日に因み、5月12日に制定されました。

日本看護協会は、看護の日のテーマを、「さあ、看護の未来を見つけないこう」と題し、様々なイベントを開催しました。看護の魅力を伝えるトークイベントや「忘れられない看護エピソード」が紹介されました。本院看護部では、趣向を凝らした生花を毎年展示しています。

今年度は正面玄関から待合ホール左側の一角に場所を移動しました。お花のテーマは「千紫万紅(せんしばんこう)」、多種多様な色の花が咲き乱れることを意味しています。途中新たなお花を追加し、10日間ご鑑賞いただきました。外来通院患者さんをはじめ、入院中の患者さんから、「気分転換になった、お花を見て癒しの時間



が貰えた」など好評でした。展示されたお花のように、多職種が力を合わせ明るい未来に向かうことを期待します。

また、入院患者全員へ工夫を凝らしたメッセージカードを作成し手渡しで配布しました。患者さんからお礼の返信や「ありがとう」の言葉とともに、たくさんの笑顔をもらい勇気づけられました。

私たちは、いのちをまもり、支えるプロフェSSIONALであり続けるよう日々精進し、患者さんに寄り添える看護を提供していきたいと思ひます。

(看護部 看護師長 對馬雅子)

### 弘前大学医学部附属病院へのご寄附、心より御礼申し上げます

お名前掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。今号では、令和6年2月から令和6年4月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。(経理調達課)

#### 寄附者ご芳名

- 澤田 直也 様 ○山田 良一 様 ○高橋 修一 様 ○高橋 英子 様
- 医療法人 和田クリニック内科・胃腸科 理事長 和田 一穂 様
- 匿名希望 5人

\*掲載の同意をいただいた方以外は、匿名希望とさせていただきます。

### 【編集後記】

夏至が近づき、気がつけば街のあちこちにねぶた小屋が建っています。この時期、私が密かに楽しみにしているのが宵宮です。開催を知らせる花火の音が聞こえると、「今日ほどこの宵宮かな」と気になってしまいます。附属病院近くの最勝院の宵宮は数十軒の露店が出て賑やかですが、露店数軒のこじんまりした宵宮も風情があって良いものです。弘前高校隣の袋宮寺には立派な十一面観音像がありますが、数年前の宵宮でお参りし、その大きさに圧倒されました。こうした文化財との思いがけぬ出会いがあるのも宵宮の醍醐味です。この時期は日が長く、気がつくまで遅くまで仕事をしてしまいがちです。働き方改革を兼ねて、宵宮に出かけてみてはいかがでしょうか。(病院広報委員会 委員長 田坂定智)